風見鶏

昨日の淵ぞ今日は瀬に

子供の頃の川遊びで溺れかけた経験がある人に聞いたことがある。流されてもう駄目だと思った時、生まれてからの記憶が走馬灯のように頭を駆け巡ったという。科学的には「何とか助かろうと記憶の中から手掛かりを探す脳の働き」との分析があるそうだ。

生死の境までいかなくとも人間は進退きわまると不思議な事が起こる。衆院議員の辻元清美氏は今年秋、それを経験した。

9月28日に衆院が解散され、所属していた民進党は希望の党に合流を決めた。「憲法改正に賛成しろ」と急に言われても承服できない。無所属での出馬を覚悟したが、受け皿がないままでは仲間の若手候補らの当選はおぼつかない。

悩んで寝付けない夜が続く。10月1日朝、政治の師である故土井たか子元衆院議長の声が聞こえた気がした。「逃げちゃダメ。試練を受け止めて前に進め」

辻元氏は上京する新幹線の中から枝野幸男氏に電話をかけ「立憲と民主主義を世に問うて砕け散ったら本望やんか」と伝えた。旗揚げした立憲民主党は予想以上の支持を集め、野党第1党の座をつかんだ。

2017年政局の中心には女性がいた

小池百合子氏

辻元清美氏

蓮舫氏

稲田朋美氏

あの声は夢だったのか。辻元氏は21年前の衆院選を思い出した。当時の社民党は発足直後の旧民主党に候補予定者が多く流れ、追い込まれていた。土井党首は議員会館に辻元氏を招き、「若い人たちにバトンタッチしたい」と初出馬を促した。あれは同じ10月1日。巡り合わせに驚いた。

今年、高転びに転んだのが東京都知事の小池百合子氏だ。7月の都議選で地域政党「都民ファーストの会」を率いて圧勝。10月の衆院選では一転して自ら立ち上げた希望の党が手痛い惨敗を喫した。

民進党全員の合流に関する「さらさらありません」「排除いたします」との居丈高な発言が反発を招いたのは確かだ。しかし一番の失敗は衆院選への認識の甘さではなかったか。

政権選択なのに首相候補すら示せない。目玉政策は「12のゼロ」。原発ゼロと待機児童ゼロはまあいいとして、満員電車ゼロ、ペット殺処分ゼロ、フードロスゼロ、ブラック企業ゼロに至っては公約というより願望に近かった。

獲得できたのは50議席どまり。希望の党の幹部は「せめて解散が年明けだったら」と準備不足を悔やんだが、政権担当能力を証明するにはそれなりの人と政策が必要なのは当然だ。

政局を振り返ると、女性がここまで注目された1年も珍しい。自民党の都議選敗北は稲田朋美元防衛相、豊田真由子氏、安倍晋三首相の昭恵夫人らの言動が影響した。民進党分裂を招いた前原誠司前代表は、蓮舫氏の都議選後の唐突な代表辞任で選ばれた。与野党双方に不倫疑惑で世間を騒がせた女性議員もいた。

来年の焦点は、9月の自民党総裁選で首相が3選を果たせるかどうかだろう。憲法改正の行方に直結し、改憲論議の進み具合は野党再編の軸とも絡む。

首相は国政選挙で5連勝したとはいえ、政権運営が順風満帆とは言いがたい。日経世論調査の12月の内閣支持率は50%。なお高いが女性の支持率は男性より13ポイントも低い。不支持理由は「人柄が信頼できない」がトップだ。有力な首相候補の不在が安倍1強をさらに際立たせている面がある。

「世の中は何か常なる飛鳥川　昨日の淵ぞ今日は瀬になる」。政治家は世の移ろいの速さを詠んだ古今集の和歌を好んで引用する。安倍政権の「次の選択肢」は誰がいつ示すのか。男性か女性か。与党か野党か。思ったより早く、局面が再び変わる可能性はある。

（編集委員　坂本英二）